

解説／大沢正道

この巻は、社会と個人および性の解放を主題とする評論、研究、翻訳を収録した。一九二二年（大正一）から一八年（大正七）、年齢でいえば二七歳から三三歳の間の著述が大部分を占めている。

三八年の大杉の短い生涯は、大きく分けて三つの時期に区分することができる。第一期は一九一一年（明治四四）まで、第二期は一九二二年、雑誌『近代思想』（一九二二～二四）の創刊から、『平民新聞』（一九一四～一五）、第二次『近代思想』（一九一五～一六）、『文明批評』（一九一八）の廃刊にいたる六年間、そして一九一八年四月に創刊された『労働新聞』以降、一九二三年の死までを第三期とみることでしよう。

第一期は、この叢書中の一卷『青年に訴う』の解説で小松隆二が書いているように、足尾銅毒事件や日露戦争に対する反戦運動を媒介にして、本能的な叛逆児が次第に革命的な無政府主

義者に鍛えられてゆく過程といえる。

大杉自身が「クロボトキン総序」(『現代思潮社版全集第四卷』「『クロボトキン研究』所収」)で告白しているところによれば、

彼はこの時期にクロボトキンの著書を何回となく読み返し、暗記するほどに精進したという。

ところが、獄中で彼はこのままではクロボトキンの奴隷になる、無政府主義の奴隷になる、と気づいた。彼はクロボトキンの著書をことごとくはおり出して、社会学、人類学、哲学、文学など当時の最も新しい学問、知識を吸収しはじめた。

いうなれば、この段階が第二期に当るものである。大杉はなお続いて、書物から学ぶのではなく、現実の運動から学ぶことこそ、本当の学問であり、知識であることをしばらくのちに発見した、と述べているが、さしずめ第三期はこの発見以後に属するとみてよいであろう。

クロボトキンの奴隷、無政府主義の奴隷になつてはならない、もっと視野を拡げ、時代の最新の学問、知識を知らなくてはならない、という自覚は、大杉と他の多くの無政府主義者、社会主義者とを区別するポイントの一つといえよう。

大杉は、この自覚に支えられて、彼自ら自嘲風に名づけた「翻訳社会主義者」から半歩脱皮し、オリジナリテイに富んだ思想を展開することができたのである。

それはまず、社会的個人主義という主張となつて現われている。社会的個人主義は、大杉の第二論文集のタイトルにも使われており、この時期の彼の思想傾向を最も特徴的に示している

と言つてよい。

社会的個人主義という用語は、おそらく大杉の独創ではなく、フランスあたりにタネ本が求められるのではないかと推定されるが、確証はない。また、大杉がこのことばをはじめて用いた論文である「近代個人主義の諸相」も、なにか下敷きがあったのではないかとおもわれる。

というのは、彼はこの論文を書くまえに、すでに個人主義の承譜に属する思想家としてステイルナーを紹介し、また、J・M・ギューイヤーやニーチェにすくなからぬ関心を示しているにもかかわらず、この論文はそれ以前の評論や翻訳の蓄積の上に立ってだけ書かれたとおもえぬ節が多々あるからである。

そうではあるけれども、大杉にはこの論文で展開した第一期個人主義(能動的、楽観的)、第二期個人主義(心理的、悲観的)、第三期個人主義(社会的、総合的)のロジックが気に入っていたようで、三年後に書かれた「最近思想界の傾向」でも、ふたたびこのロジックを確認している。

それでは、社会的個人主義とはいかなる主張であるか、というと、大杉は『社会的個人主義』の自序でつぎのように定義を加えている。

「社会的個人主義とは各個人の個性の多種多様な自由な発達が、社会組織の第一条件であり、社会進化の第一要素であるべきことを主張する一社会的学説である。」

大杉に言わせれば、「社会的個人主義は世界の思想界の数十年来の大勢であり」、それはやがて無政府主義（大杉の言う狭義の社会的個人主義）に接近してゆくし、ゆかせなければならぬものであった。

現実の歴史の歩みはかならずしも大杉の予想のとおりにはならず、思想界の大勢ではなくて、夫子自身がふたたび無政府主義へと立ち帰る結末となったのだが、それまでの思想上の経緯は、この巻の第I部「社会と個人」の前半がみずから語っているとおもう。

「社会と個人」の後半、「必然から自由へ」「史的社会観」「僕の現代社会観」は、大杉がマルクス主義へアプローチしていった折の土産物として理解してもらえばよい。

大杉の社会認識には社会学、人類学など諸科学の成果とならんで、通俗化されたマルクス主義が混在しているが、これらの翻訳、評論はその一例を示すものといえる。

まゑに述べた大杉の生涯における第二期は、思想的に蓄積期であっただけでなく、彼の人間形成の上にも試練の時代であった。一九一六年、第二次『近代思想』廃刊前後から生じた伊藤野枝、神近市子をめぐる恋愛事件は、同年一月の有名な葉山「日蔭茶屋」での刃傷沙汰にまで発展し、一般世間だけでなく、ごく親しい同志たちからもきびしい非難を蒙った。

第II部「性の解放」に収めた諸論文が示しているように、大杉はこの問題について早くから関心を抱いていた。それからして、悪魔の仕業とまで罵られたこの恋愛事件を、日頃主張して

いた自由恋愛論の実践と見る説も出てくるのだが、それは恋愛の本質にうといものの説であらう。

この恋愛についての大杉の心境は「男女関係について——女房に与えて彼女に対する一情婦の心情を語る文——」にもっともよく表現されているとおもわれる。要するに、一夫一婦制度のもつ矛盾にぶちあたり、諦めたり、忍従したりするのではなく、なんとかこの壁を突き破ろうとするものがきと苦しみ、そこによく表現されている。ここに描かれているかぎりでは、大杉もやはり明治生まれの、古風なところのある男性のような印象を受ける。

なお、当初の予定では「無政府主義の哲学」I・IIの二巻で、いわゆる第二期に発表された著述（文芸関係や雑文を除いて）をほとんど収録するほか、第二期から第三期への過渡期に書かれたクロボトキンの思想に関する研究も含めてゆく予定であったが、ページ数の都合で、クロボトキンの思想に関する部分は現代思潮社版全集第四巻『クロボトキン研究』に収めた。御諒承をいただきたい。

以下、この巻に収録した論文、翻訳の初出の場所および発表年月、版による表題、内容の異同等を列記する。

『社会的個人主義』自序 『社会的個人主義』（一九一五年一月・新潮社）。

唯一者 『近代思想』一卷三号（一九一二年十二月）。

意志の教育 『近代思想』三卷二号（一九一五年一月）。
生の道徳 『近代思想』二卷一号（一九一三年一〇月）。アルス版全集第六卷「生命の道徳」
は同書の部分訳である。

叛逆者の心理 『近代思想』二卷六号（一九一四年三月）。
主観的歴史論 『近代思想』二卷七号（一九一四年四月）。
近代個人主義の諸相 『早稲田文学』一二〇号（一九一五年二月）。
物事の考え方 『新潮』一月号（一九一六年一月）。

大正五年文壇の予想 『新潮』一月号（一九一六年一月）。
最近思想界の傾向 『文明批評』一号（一九一八年一月）。
無政府主義の腕 『労働運動』一次五号（一九二〇年四月）。
必然から自由へ 『近代思想』二卷三号（一九一三年二月）。
史的社会観 『第三帝国』四九号（一九一五年八月一日）。
僕の現代社会観 『第三帝国』五〇号（一九一五年九月一日）。のち「現代社会観」と改題し
て『自由の先駆』に所収。

無政府主義と組織 『労働運動』三次一号（一九二二年二月）。
羞恥と貞操 『近代思想』一卷六号（一九一三年三月）。

男女関係の進化 『社会的個人主義』に掲載。執筆年月は一九一五年一〇月。

動物の婚姻と家族 『新小説』七月号（一九一一年七月）。のち『男女関係の進化』（一九一
六年一月・春陽堂）の第二章として所収された。

『女学生』 『近代思想』一卷九号（一九一三年六月）。

『婦人解放の悲劇』 『近代思想』二卷八号（一九一四年五月）。

処女と貞操と羞恥と 『新公論』（一九一五年四月）。のち「羞恥と貞操と童貞」と改題して
『社会的個人主義』に所収。

男女関係について 『女の世界』（一九一六年六月）。

ザック・バランに告白し輿論に答う 『新日本』七卷一号（一九一七年一月）。伊藤野枝と共
稿とされているが、大杉の執筆と推定される。

大杉栄選 無政府主義の哲学Ⅱ奥付 大沢正道編者代表
現代思潮社刊 一九七一年三月三十一日初版 六〇〇円 株
式会社文栄社 本文印刷 広橋精版印刷株式会社 装本印刷 今
泉誠文社製本

株式会社現代思潮社 東京都文京区小日向一丁目二四十八 電話営
業部代表(九四三)四四〇六 出版部代表(三五三)八一〇一
振替東京七二四四二 郵便番号一二二

© Masamichi Osawa, 1971.
0395-67005-1909